

杜甫「兵車行」における「耶嬢妻子」について

| | |
|-----|---|
| 著者 | 大橋 賢一 |
| 雑誌名 | 中国文化：研究と教育 |
| 巻 | 71 |
| ページ | 96-108 |
| 発行年 | 2013 |
| URL | http://doi.org/10.15068/00150994 |

杜甫「兵車行」における「耶嬢妻子」について

大橋 賢 一

はじめに

杜甫「兵車行」(清、仇兆鰲『杜詩詳注』巻二、中華書局、一九七九年。以下『詳注』と略称)は、次のように始まる。

車轆轤、馬蕭蕭 車轆轤、馬蕭蕭

行人弓箭在各腰 行人の弓箭おのおの各腰に在り

耶嬢妻子走相送 耶嬢妻子走りて相送る

塵埃不見咸陽橋 塵埃に見えず 咸陽橋

牽衣頓足攔道哭 衣を牽き足を頓し道を攔りて哭す

哭声直上干雲霄 哭声直上し雲霄を干す

これは杜甫の代表的な樂府詩だが、四句目の「妻子」の解釈は、従来大きく二つに分かれている。

一つは松浦友久「耶嬢妻子走相送」唐詩の白話的表現と厭戦詩の発想、「ふたたび「耶嬢妻子走相送」について——戦争詩における「主題」と「素材」の異同を中心に」(共

に『詩語の諸相——唐詩ノート』研文出版、一九八一年所収。以下二つの論文をまとめて記す場合には松浦論文と、區別して示す場合には前者を松浦a、後者を松浦bと記す)に示されている見解で、白話的(口語的)な「つま」の意味に解釈する、というものである。松浦論文はその根拠として次の三点を挙げる。①「耶嬢」が白話的・俗語的であることから「妻子」もまた白話的・俗語的な「妻」の意である方が語感としてまとまりがとれる。②杜甫の詩の中に「妻子」が妻を意味する用例がある。③『詩経』以来、中国の文学史に厭戦の感情を歌う作品が多いが、それらは「父や母や妻が若い兵士を見送る」という情景設定の作だけであり、「子供が父親を送る」という情景設定の作は容易に見出せない。松浦論文はその論拠として③を最も重視している。

もう一つは、吉川幸次郎『杜甫詩注 第一冊』(岩波書店、

二〇一二年）にみえる説であり、「耶娘」が父と母という二つの意味を示しているから、「妻子」も同じく妻と子の二つを意味するという見解である。結論としては「妻および子であろう。現在の口語では〔妻子〕^{ウ・ヰ} 二字で、つまを意味し、またその例は唐代の文献にもすでにある。この場合もそれだと主張する説が、近ごろ松浦友久氏などにあるが、私は賛成しない」と松浦論文を否定する。

松浦論文にしても、吉川注にしても、杜詩にみえる全ての「妻子」の語を検討した上で結論に到ってはいない。また、松浦論文の「子供が父親を送る」という情景設定の詩は容易に見出せない、という点についても再考する必要があるであろう。そこで本稿では杜詩の「妻子」の語に関する諸問題を再考し、あわせて文学作品として、この語をどのように解釈するのが妥当であるかについて考えてみたい。

一

まず、松浦論文の根拠となっていた「子供が父親を送る」という情景設定の詩は容易に見いだせない、という点について考えよう。『詳注』は「兵車行」の妻子の先行例として魏の文帝曹丕「見挽船士兄弟辞别（船を挽く士の兄

弟の辞別するを見る）」（遠欽立『全魏詩』巻四⁽¹⁾）を引く。三句目以降を見よう。

舍我故郷客 我が故郷の客を捨て^す

将適万里道 将に万里の道に適かんとす

妻子牽衣袂 妻子 衣袂を牽き

拭淚霑懷抱 涙を^{ぬぐ}拭いて懷抱を^ぬ霑らす

還附幼童子 還た幼童子に附かるるも

顧托兄与嫂 兄と嫂とに顧托す

張強・田金霞『三曹詩集』八三頁（三晋出版社、二〇〇八年）が「詩抒写挽船士兵離別家郷時的悲痛（この詩は船をひく兵が故郷から離れる際の悲痛な思いを表している）」という問題を付しているように、これは弟が従軍する際に妻と子供を兄に託している場面を描くものである。

松浦^りでは、何遜「見征人分別（征人の分別するを見る）」（『全梁詩』巻九）の「征人拔劍起、兒女牽衣泣（征人は劍を抜いて起ち、兒女は衣を牽いて泣く）」という句が、子が従軍する父を送る先例と見なし得るといふ、某氏からの松浦^aに対する反論があったことをとりあげ、この詩の末尾にみえる「且当横行去、誰論裹屍入（且^{しほ}く当に横行し去るべし、誰か論ぜん屍を^{かえ}裹みて入らんことを）」を踏まえ、これが勇戦詩の系譜上にあることを根拠として、

厭戦詩としての杜甫「兵車行」とは意味合いが異なると説明している。しかし、この曹丕の詩は、むしろ厭戦詩の系譜上にある点で松浦論文の反証となり得るものである。厭戦詩において「子供が父親を送る」という情景設定が少ないということは確かだとしても、それはあくまでも傾向を示しているに過ぎない。中国詩史の系譜において「兵車行」が孤立しているわけではないことを考えあわせるならば、「兵車行」の「妻子」が妻と子を意味していたとしても不自然ではあるまい。「兵車行」と同時期のことを記したものととして、『資治通鑑』卷二一六、唐紀、玄宗天宝十載（七五二）があり、ここには、

時調兵既多、国忠奏先取高勳。於是行者愁怨、父母妻子送之、所在哭声振野。

時に兵を調すること既に多く、国忠 奏して先ず高勳 あるものを取る。是に於いて行く者愁い怨み、父母妻子 之を送り、所在 哭声 野に振う。

とみえる。この「父母妻子」は出征兵士の両親と妻と子供を指す。松浦 a 注(22)はこの例を引き、「子供もそれ(II) 従軍する父のこと」を送るといふ記述になっている。歴史書と詩歌の記述の態度の異同として、特に興味深い」と述べるが、子供が従軍する父を送る記述が歴史書にある以上、

それが詩に反映される可能性を完全に否定することには繋がない。また時代は下るが、明、劉渙「征夫詞」（『石倉歴代詩選』卷三三八）には、

征夫語征婦 征夫 征婦に語る

死生不可知 死生 知るべからず

欲慰泉下魂 泉下の魂を慰めんと欲せば

但視襖中兒 但だ視よ 襖中の兒

というように、若い兵士が残された家族を思う際に自分の幼子を気遣う描写がある。これは従軍する兵士にも子供がいる場合があることを示しているよう。

これらは子供が父を見送る場面が描かれないという可能性が皆無ではないことを裏付ける。松浦 a は、『詩経』から唐末まで子供が父を見送る厭戦詩はほとんど存在しないことを指摘した上で、「唐代における著名かつ典型的な厭戦詩としての「兵車行」のみが、こうした文学史的伝統のほとんど唯一の例外でありうるということ、はなはだ困難だといわなければならない」と結論づける。しかし、ここまで確認してきた事柄を踏まえると、従来の厭戦詩に子供が父を見送る詩が多く見られないことを理由として、「兵車行」の「妻子」もまた妻を意味すると判断する松浦論文の考えを受け入れるのは難しいと思う。

次に、視点を変えて杜詩における全ての「妻子」について検討することで、この語句がどのように用いられているのか、その傾向について確かめてみたい。杜詩における「妻子」は、「兵車行」を除くと全部で一四例あり、そのうち明らかに妻と子を指すものは一〇例ある（用例数は『杜詩引得』上海古籍出版社、一九八五年による）。例えば「述懐」（『詳注』巻五）には、

去年潼関破 去年 潼関破れてより
妻子、隔絶久 妻子 隔絶すること久し

とみえる（傍点筆者。以下同じ）。『詳注』によれば、この詩は至徳二載（七五七）夏の作である。この「妻子」は、鄜州に疎開させていた家族を思いやることを詠じる中で用いられている。この時期に書かれた「得家書（家書を得）」には、「熊児幸無恙、驥子最憐渠（熊児 幸に恙無く、驥子 最も渠を憐む）」とあり、ここにみえる「熊児」と「驥子」は杜甫の子の幼名を指すだろうから、「述懐」の「妻子」は妻と子を意味することがわかる。

このような、杜甫自身の家族を示す「妻子」は、この他に八例ある⁽²⁾。また、杜甫以外の家族を示す例としては、「過

故斛斯校書莊二首（故斛斯校書の莊を過る二首）・其一」（『詳注』巻一四）がある。

妻子寄他食 妻子 他食に寄る

園林非昔遊 園林 昔遊に非ず

この詩は生前交流のあった斛斯融を偲んで作ったものであり、ここでの「妻子」は斛斯融の遺族を指すから、その家族である妻と子を意味しよう。

なお杜詩には「自閬州領妻子、卻赴蜀山行三首（閬州より妻子を領し卻て蜀に赴くとき山行す三首）」（『詳注』巻一三）のように詩題に「妻子」を含むものがある。成都に向かう詩の「妻子」であるから、これは共に連れて歩いた杜甫の妻と子と解釈できる。

また、「妻子」の他に妻と子を意味するものとして「妻児」があり、「別李秘書始興寺所居（李秘書の始興寺の所居に別る）」（『詳注』巻一九）に「妻児待米且歸去、他日杖藜來細聽（妻児 米を待ちて且つ歸り去らん、他日藜を杖いて来りて細かに聴かん）」とみえることを付言しておく。

一方、妻だけを指す例は、松浦 a も指摘しているように二例ある。

汝去迎妻子、汝去りて妻子を迎え

高秋念卻回 高秋 卻回せんことを念おもう

①「舍弟觀歸藍田迎新婦送示二首・其一」(『詳注』卷一)

汝迎妻、子、達荆州 汝妻子を迎えて荆州に達すと

消息真伝解我憂 消息真に伝り我が憂いを解く

②「舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄三首・其一」『詳

注』卷二(一)

いずれも弟の杜観にあてた詩である。前者は妻をめとりに藍田県に行くのを見送る際に作って示した詩であり、後者は弟が藍田県にいつて妻をめとり江陵に到着したことを聞いて、杜甫が寄せた詩である。また、この他の例として松浦 a は「新婚別」(『詳注』卷七)を引用している。

結髮為妻子 結髮して妻子と為り

席不暖君床 席 君の床を暖めず

ただ、これには「樊作子妻」(錢謙益『錢注杜詩』卷二、上海古籍出版社、一九五八年)という校記があり、これを証左とするには問題が残る。

このように杜詩における「妻子」の用例は、妻と子という意味で用いる場合が多くを占める。各例を検討して気がつくことは、妻と子を表す場合は、「過故斛斯校書莊二首」の「妻子」が斛斯融の妻と子を指していることを除き、

他は杜甫のそれを意味していることである。対する「妻」については、「新婚別」を含めたとしても三例に止まる。

弟、杜観にあてた二首は共に杜観の妻を指し、「新婚別」

は出征する兵士の妻を指す。用例数からいえば、杜詩の「妻子」は妻と子を指すことも一般的であるといえる。また杜詩の「妻子」はある特定の人物の妻と子、あるいは妻を示していることが確かめられた。

「兵車行」の「妻子」については、三句目の「行人弓箭在各腰」という表現から、兵士が複数いるのは明白である。かかる点において、「兵車行」の「妻子」は、不特定多数の者を表しているという点で、他の例と異なる。加えて杜詩の「妻子」が、ある特定の人物の妻、あるいは妻と子を示していることを踏まえると、「兵車行」はそれらからもはざれている特殊な例であることがわかる。

三

松浦論文は、「兵車行」では「耶娘」と「妻子」が対比されるように用いられており、かつ「耶娘」が白話的・俗語的であることから、「妻子」も白話的・俗語的な意味である妻の意であるほうが、文語的・伝統的な「妻と子」であるよりも語感としてまとまりがとれると指摘する。確か

に杜詩には白話・俗語が多用されているし、またそのことが杜詩の魅力の一端となっていると考えられる。⁽³⁾ただ、妻を意味し得る「妻子」については、これを白話的・俗語的表現と断定するのは難しいのではなからうか。

松浦 a の注 (4) にも指摘があるように「妻子」自体はすでに『詩経』小雅「常棣」に、

妻子好合 妻子好合し

如鼓瑟琴 瑟琴を鼓するが如し

兄弟既翕 兄弟 既に翕い

和樂且湛 和樂し且つ湛たのしむ

とみえている。松浦 a は「同じ詩の次の章に「宜爾室家、樂爾妻帑」の語があることから、妻と子を含む用例と見るのが穩当であろう」と述べ、これは妻と子を意味する「妻子」であって、白話的・俗語的ではないと判断する。なお「帑」は、毛伝に「子也」とあるように子供を意味する。確かにこの「妻子」は「兄弟」と対比されているから、妻と子を意味する可能性もあろう。ただ、例えば李連祥『唐詩常用語詞』(百花文芸出版社、二〇〇九年)では、②の意味として「单指妻子一人、其中子為助詞。這種用法雖不普遍、但說明今日称妻為妻子是有其淵源的(単に妻一人だけを指し、子は助詞である。この種の用法は一般的では

ないが、今日妻を妻子と称することの淵源となっていることを立証している)」とし、「常棣」と杜甫「新婚別」を引く。また、清原宣賢講述『毛詩抄』(二二八三頁(岩波書店一九九六年)が「王の燕礼の時は、后も女房衆は女房衆と燕せらるゝぞ」と述べており、宴会に出ている者である「妻子」を「女房衆」と言い換えている。このように「妻子」を妻と解しているものがあることは無視できない。解釈者によつてこの「妻子」が妻と解釈されてきたという事実がある以上、妻と子と解釈するのが正しかったとしても従来、解釈にゆれがあつたことは確かである。

「耶娘」が白話的・俗語的表現と判断できるのは、この語に対する文語的・伝統的表現である「父母」という表現があるからであるが、「妻子」については該当するものがなさそうである。また字が同じであることから、文脈から妻と子か、あるいは妻かを判断しなくてはならず、このことが解釈を特定することを難しくしている。以上のことから、「兵車行」の「妻子」については、文語か白話かを特定することは不可能に近いと言わざるを得ないであろう。

四

前掲、吉川注の指摘の通り、「兵車行」において「耶娘」

と「妻子」とが対比されしているとすると、「妻子」が妻と子を意味しなければ、意味上の対比構造が崩れてしまう。また「妻子」が妻を指すとすれば、「耶娘妻子」は、父、母、妻の三者を意味し、兵卒を送別する家族が、この三者に限られることとなる。

杜詩においては、「耶娘妻子」のように「妻子」を含む二語が続けて用いられる例は他にはない。ただ、例えば本稿の注(2)に示した「三絶句・其一」にみえる「群盜相隨劇虎狼、食人更肯留妻子」のように、「虎狼」と「妻子」とが対比され、上の句が虎と狼を指していることから、「妻子」が妻と子を意味していることがわかる例がある。

このような例は、先に挙げた『詩経』の「常棣」もそうである。同様の例は、王粲「詠史詩」(『全魏詩』巻二)にもみえ、ここでは「兄弟」と対比されている。

妻子、当門泣 妻子 門に当りて泣き
兄弟、哭路垂 兄弟 路に哭して垂る

李善注(『文選』巻二二)によれば、これは秦の穆公子車氏の三子、奄息、仲行、鍼虎を殉死させたことを詠じた詩で、ここではその三人の妻と子、及び兄弟がその死を悼んでいることを描く。

唐代の例としては初唐、宋之間「早発大庾嶺(早に大庾

嶺を発す)」(『全唐詩』巻五二)に同様の対比がみえる。

兄弟、遠淪居 兄弟 淪居遠く
妻子、成異域 妻子 異域と成る

詩題の「大庾嶺」は五嶺の一つで、江西省と広東省の境に位置する。「淪居」は未詳だが、左遷先の粗末な住居と解しておく。陶敏・易淑瓊『沈佺期宋之間集校注』四二九頁(中華書局、二〇〇一年)によれば、この詩は宋之間が左遷先の瀧州に向かうときに詠んだものである。ここでは都の「兄弟」と、そこから離れた異域にいる「妻子」とが対比されている。

盛唐、高適「哭単父梁九少府(単父梁九少府を哭す)」(『全唐詩』巻二二二)には「弟兄」との対比がみえる。

妻子、在遠道 妻子 遠道に在り
弟兄、無一人 弟兄 一人無し

劉開揚『高適詩編年箋注』八七頁(中華書局、一九八一年)によれば、この詩は単父県尉の梁洽が若死にしたことを悼んだもので、一家の長を亡くした梁洽の遺族が孤立していることが、「妻子」「弟兄」を対比することを通して表現されている。

杜甫より時代が下る例であるが、寒山「我見世間人(我世間の人を見る)」(項楚『寒山詩注』中華書局、二〇〇

○年)には、

箇箇惜妻兒、箇箇妻兒を惜しみ
爺嬢不供養、爺嬢を供養せず

という形で、「妻兒」と「爺嬢」とが対比されている。

散文の例としては、『列子』巻四、仲尼に、「固不可事国君、交親友、御妻子、制僕隸、(固より国君に事え、親友に交わり、妻子を御し、僕隸を制すべからず)」とあり、また魏、曹植「求通親親表(親親を通せんことを求むる表)」（『文選』巻三七）にも「左右惟僕隸、所対惟妻子(左右は惟だ僕隸のみ、対する所は惟だ妻子のみ)」とある。これらでは「妻子」が「僕隸」と対比されている。「僕」も「隸」も共に召使いという意味であるから、「妻子」もそれぞれ意味を持つと考えられるので、これらは妻と子を意味すると考えられよう。また、前漢、司馬遷「報任少卿書(任少卿に報ずる書)」（『文選』巻四一）には、「夫人情莫不貪生惡死、念父母、顧妻子、(夫れ人情、生を貪り死を惡み、父母を念い、妻子を顧みざるは莫し)」とある。この例では「父母」と「妻子」とが対比されていることに注意しておきたい。

無論、例えば阮籍「詠懷詩十七首・其三」（『文選』巻二二）に、

一身不自保、一身すら自ら保たず

何況恋妻子、何ぞ況や妻子を恋わんや

とあるように、常に「妻子」が何かと対比されているわけではない。ただ、先に示した例のように、「妻子」は何らかの語句と対比されて用いられる傾向があることから、「耶娘」と「妻子」もまた、父と母、妻と子を意味している可能性が高いと思われる。

また、先に引用した『資治通鑑』にもあつたように、「耶娘妻子」ではなく、「父母妻子」という形で用いられるものとして、「郤犇与長魚矯争田、執而梏之、与其父母妻子同一轅(郤犇、長魚矯と田を争い、執えて之を梏し、其の父母妻子と同じく一轅にす)」（『左伝』成公十七年伝）があり、この語が先秦から使われているものであることがわかる。杜甫以前の詩には「父母妻子」という例は無いようだが、⁽⁴⁾「耶娘妻子」についても、「妻子」が「兄弟」などと対比的に用いられる傾向があることから、各々独立した意味を持つと見なすことも不自然ではなからう。

五

「兵車行」の「妻子」は「耶娘妻子」という形で、四字でひとまとまりになっていることが特徴的である。先の検

討から、「耶娘妻子」という形は従来の中国古典詩では特殊な例と考えられよう。ただ、四字がひとまとまりになっているという形自体は、成語などに代表されるように、むしろ一般的と思われる。

温端政著／高橋均・高橋由利子編訳『諺語のはなし——中国のことわざ』一一頁（光生館、一九九一年）は、成語に広義と狭義の二つの解釈があると述べ、狭義の成語を「おもに書面語に由来するものをいう。それはだいたい四字または四字ずつ二句の対句で構成されている」とし、例として「青出於藍」「守株待兔」をあげている。

こうした四字から成る成語は、表面的な意味とは異なる意味をも合わせ持つ。「青出於藍」であれば、青色は材料となった藍よりもより青いというのが表面的な意味であるが、弟子が師よりもすぐれていることを暗示する。「切磋琢磨」もまた、玉や石をみがくことが表面的な意味であるが、学問に励み、人格をみがくという意味を暗示する。文法的には「青出於藍」は主語＋述語＋補語という形になっており、「切磋琢磨」は動詞が連続する形になっていることから、両者には構造的な違いがあるが、四字＝四音節からなること、また表面的な意味とは異なる別な意味を持つという点では共通している。

「耶娘妻子」は成語とまでは言えないまでも、四音節から成っているという点では成語と共通する。また、「耶娘妻子」が一語となっていることで、単に父、母、妻、子の意味するのではなく、出征する兵士を見送る家族全体を意味していると考えられよう。

杜詩の中には成語ではないが、このような四字から成る語句が、表面的な意味とは異なる意味合いを示しているものがほかにある。例えば「追酬故高蜀州人日見寄（故高蜀州の人日に寄せらるるに追酬す）」（『詳注』巻二三）に、

東西南北更誰論 東西南北 更に誰か論ぜん
白首扁舟病独存 白首扁舟 病みて独り存す

とある。これは高適が生前に寄せた「人日寄杜二拾遺（人日 杜二拾遺に寄す）」（『全唐詩』巻二二三）に、高適の死後、杜甫が和したものである。高適の詩の末句には「愧爾東西南北人（愧ず 爾 東西南北の人に）」と見えており、杜甫はこの部分を意識してこの一聯をよんでいる。これらにみえる「東西南北」は、孔子が自分のことを「東西南北人」と評した故事を踏まえたものである（『礼記』檀弓上）。これは東西と南北とが対比された語句であるが、二語が合わさって全国各地という意味をも合わせ持つ。このような例としては、「蘇端薛復筵簡薛華醉歌（蘇端薛復の筵にて

薛華に簡する醉歌）（『詳注』卷四）にみえる「何劉沈謝」も該当しよう。

近來海内為長句 近來海内 長句を為る[?]

汝与山東李白好 汝と山東の李白と好し

何劉沈謝力未工 何劉沈謝 力未だ工みならず

才兼鮑照愁絶倒 才 鮑照を兼ね 絶倒せんことを愁う

仇注によれば「何」は何遜、「劉」は劉孝綽、「沈」は沈約、「謝」は謝朓を指す。書簡をあてた薛華の文才は李白と肩を並べるだけでなく、これら四人も薛華の詩に匹敵する力がないと一蹴する。ここでは、具体的に比定できる詩人の名が挙げられているが、四人をひとまとめにすることで、六朝期を代表する文人たちの総称となつていふと考えられる。

「耶娘妻子」が父、母、妻の意味しかもたないとしても、家族全体を意味しないわけではなからうが、語句の構造を踏まえると、子供の意味をもたないとなすのは不自然なように思われる。このような点において「妻子」が妻だけを意味していると解釈するのはやはり妥当性を欠くといえよう。

まとめ

従来の「耶娘妻子」の解釈を概観してみると、松浦論文を支持し、「父母や妻が追いつがるようにして見送る」（横山伊勢雄『中国古典詩聚花 政治と戦乱』小学館、一九八四年）と訳しているものがある一方で、「父、母、妻、子」と訳しているものが多くを占めている。^⑥このような傾向は日本語訳だけではなく、いくつかの英訳や現代中国語訳にも共通している。^⑦このうち、坂口三樹「古来白骨人の収むる無し 杜甫「兵車行」」（『しにか』六月号、大修館書店、二〇〇三年）は（傍点筆者）、

ついで、その中を進む「行人」（出征兵士）の一段と、それを見送る家族たちの姿が描写される。（中略）恐らくは西方の国境に送られるであろう兵士たちを、家族は何とか引き留めようとする。

というように「耶娘妻子」を「家族」と解している。先に検討したように、この「耶娘妻子」は四字で一語となっており、転じて家族全体を意味するような成語的性格を帯びた語句なのであつて、恐らくこうしたことが感じられたからこそ、「父、母、妻、子」と解釈するのが一般的となつているのであろう。

「耶娘妻子」が用いられているのは「兵車行」の冒頭の兵士を見送る場面であった。松浦論文の言うように、彼らを見送る家族の中に子供がいなくなると、跡継ぎがいなまま出征することになり、そのことが更に従軍の悲劇性を増すことにもなる。ただ幼子を残して従軍することも、先にあげた劉渙「征夫詞」に代表されるように、跡継ぎが成長するのを見届けているわけではないのだから、従軍の悲劇性が失われるわけではない。

川合康三『杜甫』六八頁（岩波書店、二〇一二年）では、漢代以降の従軍兵を見送る詩では、兵士と兵士を見送る妻の悲哀については言及されるが、逆に「兵車行」では同居する家族全体がぞろぞろでくることが珍しいことを指摘した上で、

行役の悲哀は兵士、あるいはせいぜい、のこされた妻を含めてうたうのが類型であったのから脱して、家族全体の悲哀という新たなたちが打ち出されている。

と述べている。かかる意味においても、「耶娘妻子」は父、母、妻、子、家族全体と解する方が、「兵車行」における杜甫の新たな工夫が、より鮮明に浮き出てくるように思われる。

また、松浦論文の指摘通り、子供が父を見送る詩が一般

的ではないことを踏まえると、「兵車行」は子供を含め家族全体で見送るという点において、従来の常套的表現から逸脱すると認められる。このことは逆に「兵車行」の新たな楽府としての魅力にも繋がっているのではなからうか。

周知の通り「兵車行」は、宋、郭茂倩『樂府詩集』巻九一、新樂府辞に見えるように伝統的な樂府題によるものではなく、杜甫の創作した新しい樂府題であった。前掲吉川『杜甫詩注』一一二〇頁によれば、唐代の戦争の主力は騎兵であって兵車による戦が稀だったのに、房琯が安祿山軍に敗れたことよって兵車が用いられることになったという。つまり「兵車行」という詩題には、漢代以来の樂府の伝統を継承しながらも、その枠組みには収まり切らない、唐という時代そのものを歌おうという思いが託されていると考えられる。

中唐の元稹は「樂府古題序」（『元稹集』巻二三、中華書局、一九八二年）において、従来の樂府に言及しつつ、唐代においては「兵車行」を含めた杜甫の樂府をとりあげ、次のように述べる。

近代唯詩人杜甫悲陳陶、哀江頭、兵車、麗人等、凡所歌行、率皆即事名篇、無復倚傍。予少時与友人樂天、李公垂輩、謂是為當、遂不復擬賦古題。

近代は唯だ詩人杜甫のみは「悲陳陶」、「哀江頭」、「兵車」、「麗人」等、凡そ歌行とする所、率ね皆事に即して篇に名づけ、復た倚傍する無し。予少き時友人の楽天、李公垂の輩と、是れ当^た為りと謂^{おも}い、遂に復た擬^{みぞら}えて古題を賦さず。

元稹は、新たな楽府題によつて作品を作ろうという杜甫の工夫に着目し、樂府史の系譜上に杜甫の「兵車行」などを置くだけでなく、これらの作品が実際の事柄に則して作ろうとしたものであることをも強調している。元稹がこのように判断しているのは、やはり、杜甫の樂府には、唐代の現実を反映しようとする意図があったことを認めただけに違いない。元稹のいうように、伝統的な枠組みにとらわれることのない新たな表現を生み出そうという思いが「兵車行」という、杜甫自身が命名した題目に表れているといえよう。こうしたことを踏まえると、新たな表現を切り開こうとした杜甫の創意工夫の一端が、「耶娘妻子」にも表れているように思われるのである。

注

(1) 『先秦漢魏晉南北朝詩』中華書局、一九八三年。以下特

にことわらない限り六朝以前の詩は当該書により、『全某詩』と時代を記載することとする。

(2) 以下に該当する例の一聯と詩題をあげておく。「妻子山中哭向天、須公櫪上追風驃」(『徒步歸行』『詳注』卷五)・「經年至茅屋、妻子衣百結」(『北征』『詳注』卷五)・「笑為妻子累、甘与歲時遷」(『寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻』『詳注』卷八)・「歎息謂妻子、我何隨汝曹」(『飛仙閣』『詳注』卷九)・「卻看妻子愁何在、漫捲詩書喜欲狂」(『聞官軍收河南河北』『詳注』卷一一)・「群盜相隨劇虎狼、食人更肯留妻子」(『三絕句・其一』『詳注』卷一四)・「妻子亦何人、丹砂負前諾」(『昔遊』『詳注』卷一〇)・「未能割妻子、卜宅近前峰」(『謁真諦寺禪師』『詳注』卷一〇)。

(3) 例えば拙稿「杜詩における「喫」について」(『杜詩教材研究論叢』三号、二〇一二年)は、杜詩において「食」と「喫」が区別され、白話的「喫」が効果的に使われていることを示唆する。

(4) 『太平御覽』卷四八三に引く「怨曠思惟歌」(『全漢詩』卷一一)の末尾に「父母妻子、道理悠長。嗚呼哀哉、憂心側傷」とみえるが、『芸文類聚』卷三〇などは「父母妻子」を「父兮母兮」に作る。なお、杜甫より後のものではあるが、「耶娘妻子」と語の構成が共通している例として白居易「長恨歌」(『全唐詩』卷四三五)の「姉妹兄弟皆列士、可憐光彩生門戶」をあげることができる。

(5) 杜詩の「東西南北」については、向島成美「東西南北の人」(『漢詩のことは』大修館書店、一九九八年)、後藤秋正「東西南北の人について」杜甫と高適の酬和詩を中心として(『東西南北の人 杜甫の詩と詩語』研文出版、二〇一一年)に言及がある。

(6) 小野忍／小山正孝『唐代詩集』(上)(平凡社、一九六九年)は「父も母も妻も子も」と訳し、黒川洋一『杜甫詩選』(岩波文庫、一九九一年)は「おとつあんもおつかさんも妻も子も」と訳している。

(7) 英語訳でいえば、例えば *Du Fu A life in poetry* by David Young, Alfred A Knopf 2008 は "parents, wives, and children" と訳している。現代中国語訳では、梁麗江『杜甫詩選』(三聯書店、一九八五年)の耶嬢二句の注に「爹嬢妻兒走着相送」とみえる。

(北海道教育大学旭川校)